

志學館カフェテラスからの桜島



先人たちが築いた桜島の特殊な災害対策

〜大噴火による島民の意識的変化〜

世界中の7%もの活火山を持つ日本だが、その中でも一際目立つものとして桜島がある。なぜ有名なのか、それは桜島が縄文時代から既に居住され続けてきたからだ。桜島は今でも活火山として周囲に灰をまき散らしている。島には約5千人ほどが住んでいる。

今回、桜島を取材して、島民は徹底した防災意識と地元愛に溢れていると感じた。現に、1914年1月12日に記録上最大規模の『大正大噴火』が発生し、翌年の九月ごろまで続いたと推定される。だが、この時の死傷者はなんと58人とどまつた。なぜ、それだけの被害で済んだのか。それは、島民たちの洞察力や、普段からの防災意識によるものだ。

防災の面では島に配置されたコンクリート製の避難壕と、避難舎が併設された避難港がある。避難壕では厚さ5センチ程のコンクリートが火山に背を向けるように島の至る所に配置されている。しかし、それだけでは大規模な噴火が起こった時に対処のしようがない。そのため、万が一溶岩が流れるなどした時のために島から避難するための避難港も用意されている。避難

← 避難壕にはそれぞれ番号が振られている



港は全4か所あり、普段は島への移動に使われているフェリー4隻が、非常時には島の避難港へと島民を迎えに行く。ちなみに、港は入り組んでいるので平常時は魚たちが寄ってきて釣りの穴場となっている。

話は戻るが、桜島の特異な景色は続く。

まず、透明度が世界一の川だ。活火山があるとなれば、濁った川を思い浮かべるかもしれない。しかし、桜島の川は透き通っている。

なぜならば、液体が流れていないからだ。それでは川ではないという意見もあるだろう。しかし、これは国が管理しているれっきとした川だ。なぜこのような川ができたかというと、土砂崩れの被害を最小限にするため

桜島を流れる川 液体がなく透明度が高い



だ。詳しいことは省くが、つまり土砂崩れを前提とした災害対策だ。

では、なぜそこまでして住むのか。それは、火山によって得られる恩恵があるからだ。

具体的に温泉や、桜島大根、桜島小みかんなどが火山による恩恵といえる。このように桜島には、危険もあるがそれを上回る魅力もある。

筆者自身も滅多に行けないところなので少しばかり興奮した。桜島という物は知っていても、実際に入ってみるとネットだけでは得られない程の情報量と景色の美しさを感じた。少し歩けば手に入る火山灰だが、桜島ではなんと500円程で売られている。歩いて手に入る火山灰と何が違うのかわからないが、興味のある人は是非購入して分析するといいたいだろう。(岩)



↑ 1914年の大噴火で3mの鳥居はすっぽりと火山灰に埋もれてしまった

新聞部 部長です

斉藤元陽(2-3)

- ①15人/平日毎日
- ②全国年間紙面審査賞に入賞する。
- ③個性豊かな人が多い。
- ④投票



会場となった志學館大学は、明治40年「女と百姓には教育はいらぬ」と言われた時代に「実際に役立つ婦人」の育成を目指し、満田ユイ先生が23歳の若さで開設された伝習所が礎となっている伝統ある大学だ。カフェテリア前には雄雄しい桜島が今なお噴火している。市内には、著名人の銅像が立ち並び、薩摩の歴史の大きさを感じられる。西南戦争の大砲の跡が残る城壁、斉彬の愛したガス灯、堀周りには鯉が涼しげに泳ぐ。車も往来したという石でできた橋は5つもあり、そのひとつは公園に移築され市民の憩いの場となっている。市内は市電やバスが、ひっきりなしに走っている。おいしいものもたくさんあった。鶏、豚、かるかん・・・食べ損ねた白熊アイス。新大阪から新幹線で1本、4時間の旅だった。



かこしま総文2023レポート

よかところ 鹿児島



7月29日から8月4日まで、高校文化部のインターハイ第47回全国高等学校総合文化祭「かこしま2023総文」が開催された。今年度は新型コロナウイルスが5類に下げられ、3年ぶりの制限なしでの開催となった。

新聞部門は7月29日から31日まで市内の志学館大学で開催された。

全国から集まった高校生が1班6名の51班に分かれて鹿児島県各地取材し、交流新聞作成に取り組んだ。
鹿児島島の良さを紹介しよう。

記者(藤)は異人館と仙巖園を巡る班に配属された。初対面時は、「こんにちは」の挨拶の後は沈黙が続き、何を話して良いのか分からない状況だった。だが、編集会議になると少し慣れ、会話が続くようになった。編集会議だと言うのに各県の名産などを話している内に時間が過ぎてしまい、簡単なレイアウトを決めて1日目は終了した。2日目はいよいよ取材へ。異人館と仙巖園取材した。桜島のそばにあり、噴火しなにかヒヤヒヤしながら取材をした。聞き取れなかったところなどはみんなで補ったりして、無事に終え志学館大学へ。1面のメイン記事担当になっていた私は急いで写真の印刷と記事の作成に取りかかったもののすぐにできるわけでもなく、記事という名の宿題を持ち帰って作成。気がつけば午前3時になっていた。どうもこれは恒例行事のようなものらしい。

3日目は、当然のごとく眠い。顧問の着信で目が覚め「ぼーっと」しながら朝食を済ませ会場へ。そしてここから本番。11時30分が締め切りなのだ。良い新聞にしようと皆が協力して仕上げた。担当の記事で



↑志学館大学にて2日目のため少々疲れ顔

ないとところもアドバイスをしなかったのが良かった。時間丁度くらいで新聞は無事完成した。大会で、年間紙面審査賞優良賞を3年連続で受賞した。皆さんのご協力あつてのことありがとうございます。長かったようで短く、そして過酷だったとも言える2人のかこしま島総文は、こうして幕を閉じた。ちなみに記者(藤)は帰りの新幹線で爆睡してしまうのであった。



↑正面から見た異人館
真ん中の2階はかつてベランダであった。

島津斉彬が築いた 日本産業の基礎 未来へ残した近代化への技術

日本産業の先駆けとなった集成館事業。製鉄、造船、紡績など多方面に及んだ。築いたのは第11代薩摩藩主、島津斉彬である。斉彬は様々な事業に力をいれ日本の近代化を図った。死後、事業は一旦止まるも薩英戦争により西洋の技術を学ぶ必要が生じ第2期集成館事業がスタートした。

今回、記者(藤)はその産業の発祥の地と言われる旧鹿児島紡績所技師館(以下 異人館)と仙巖園を取材した。

異人館と聞くと神戸をイメージする人が多いだろう。だが今回は異人館という名の技師の住まいである。

異人館は集成館事業の中の紡績に関連する建築物である。当時、帆船の帆を作ろうとしていた斉彬は英国から紡績機械を輸入。その関係で英国から、工場を動かす職人を指導する人や、機械の据え付け、建物の設計などをする人、7名が雇われその人たちが寝泊まり

していたのがこの異人館である。1867(慶応3年)年に建てられ、現在までに2度再建されている。当時異人館のような洋風な建物は珍しく、現存最古とも言

われている。建物の設計は英国の設計士によるものでコリニアル様式で建てられている。

だが、実際の構築は日本の大工さんだ。そのためドアノブも低く設置(当時の日本ではまだ襖が主流で、本来は座って開閉するものであるため)されている。西洋風だが日本の様子が入っている。

庭に出るとプラントに綿花が咲いていた。当時の鹿児島紡績所は綿織物が盛んで、その多くは関西や関東へ売られていったその名残だろう。

斉彬一家が住んだ別邸 当時の情勢に迫る

次は仙巖園だ。1658年に19代光久によって建てられた島津家の別邸だ。約15000坪ほどありその大きさは東京ドームくらいだ。入ってすぐに鉄を溶かす反射炉跡がある。以前から青銅製の大砲は存在していたが青銅は高価だったため材料費が安くつく鉄の大砲を作ることにした斉彬。だが鉄の融点は銅よりも高く火力が必要だった。そのためこの反射炉が作られた。ちなみにこの反射炉で作られた大砲は約65センチかなり大型だったようだ。歩き進めると正門が見えてくる。ここが本来の入り口だ。門の中には島津家の家紋4種類が彫られている。少し歩くと御殿が見えてくる。当時、島津家が住んでいた建物で、「謁見の間」と言われ殿が客と会うための部屋で、



↑ 殿様が入る際に使われた錫門。
門を通れたのは殿様とその子供だけだった。



↑ 斉彬が描いた金屏風

斉彬が描いた金屏風が飾られている。その奥に見えるのは広大な庭で錦江湾を池に見立て、桜島を山に見たてているとされその景色は我々記者を圧巻するものだった。

また、この庭は大河ドラマ「西郷どん」で相撲を取るシーンでも使われた。

様々な歴史があつた集成館事業。結果としては失敗に終わったそうだがここで培われた技術は全国へ広まったとのこと。

もし、斉彬がいなければ日本産業の発展は遅かったかもしれない。(藤)

1面の答え

カーブミラーが設置されている理由は、17年ほど前、鳩の被害に悩まされていたとき当時の理科の先生が、「鳩除け」のために設置したからです。畑などに鳥対策のためCDなどをぶら下げることがありますが、それと同じ役割があります。現在はミラーのおかげか鳩の被害はありません。ミラーに感謝しよう。



↑ 仙巖園庭園からの風景。写真下部に写る石畳でドラマの撮影が行われていた。